

保育におけるコミュニケーション関係の展開

— 保育集団のなりたちから —

○ 上 條 里 子

(多摩小はと保育園)

佐々加代子

(白梅学園短期大学)

はじめに

「表情豊かな子どもであってほしい。」6年間の保育経験の中で出会った子ども達とのかかわりを通して私が理想とする子ども像である。それはまた、私の保育をすすめてゆくうえでの、最も重要な子どもを見るポイントになっている。

子どもの表情をとらえた時の私の中に、子どもがかかえているであろう何らかの問題を感じたら、その問題が私自身の保育をすすめてゆく上での課題となり、問題解決の方向へと動いてゆく一連のパターンがくりひろげられてゆく。問題をかかえていた子どもに豊かな表情がもどった時、私の問題も消えてゆく。

子どもが心身ともに解き放され、安定している時の表情は、豊かであると思う。豊かな表情をもった子どもは保育士との間柄を深め、そして友達へと間柄を深める関係が湧いてゆく。人間関係の展開をくりかろげてゆく。豊かな表情をもった子ども、そういう子どもひとりひとりのあつまりの集団をつくること、私の保育の理想であり、目標である。

保育集団は、どのような子どもによって構成されるかは、出会う子ども達によって決められる。どのような子どもかいたとしても、保育はその集団の運営をまかされてゆく。保育集団の運営は、1期コミュニケーション関係の成立、2期展開、さらには3期の発展という3段階をふんでゆくものであろう。先に述べた私の保育目標達成の為には、できるだけ早く集団を構成するひとりひとりの子どもを把握することが求められる。そこから保育が展開されてゆくと考えている。それが第1期コミュニケーション関係の成立と言えよう。ここでは、保育集団の展開の基盤となるコミュニケーション成立過程を中心に、保育者のとらえかた、かかわり方について検討を加える。

保育集団における保育者の役割

保育を展開させてゆくうえでは、まず保育士が子どもの状況を知ることからはじまる。はじめは、泣く、逃げ出す、生命の危険が大きい子などに、対応の頻度が求められる。それらの子どもを見ていると同時に、他の子どもにも意識を向けてゆかなければならない。しかし、1対多対応をしてゆかなければならない保育現場においては、集団のすべての子どもと自分と

の距離関係をはかるまでには、時間を要する。

自分と子どもが、今どのような状況にいて、どこからスタートしてゆくのかかわりあった段階を、集団が集約できたということになろうか。人との関係をつくってゆくことは、コミュニケーション関係も展開させてゆくことである。集団を集約させてゆく過程は、同時にコミュニケーション関係の展開となるであろう。従って集団運営における保育の初期の役割は、ひとりひとりをよく把握することにある。

子どもと保育者の関係の展開を考える鍵

佐々の保育行動系を手がかりとする。そのため、子どもの記録には、信号行動系の記述をとることに心がける。

実践研究

昭和62年度、多摩小はと保育園、4才児、ゆり組、25人(新入園児は11名)の保育におけるコミュニケーション成立から展開過程を明らかにする。

表1は、出会いの月に得られた子どもの特徴をまとめたものである。保育集団運営上、及び保育者とのコミュニケーション関係からみて、問題を多くみた子どもについては○印をつけた。つまり保育者からみて、その子ども達について、かかわり方を濃くするという意味である。問題傾向は、日常生活習慣において手のかかる子ども(GHJ K L M N O Q R U X)、対応の細やかさを要求される子ども(C D E I P R T V W Y)の2種類に分けられる。新入園児においては、保育士が子どもを知らない状況にあり、子どもはまったく新しい環境の中にあり、園生活に対するわからなさや不安を、大いに抱えていることが予想されるので、全員○と評価する。以上のように、かかわり方において何らかの配慮を必要とする子どもは、25人中21人、残りの4人は、信号行動系がはっきりととえられるため、保育士とのやりとりが円滑であり、園生活をしてゆくうえで、困った状態ではないXとおさえられる。

日常生活に手のかかる群の子どもは、保育活動において、保育者からの目的的接近(補足資料参照)読みとり型のうちの、要求察知及び、行動補完、行動継続、行動修正を行なうことになり、細やかさの群の子どもは、表情等の視覚的・信号行動系の読みとりを要するため、接近してゆくことになる。両群とも、保育者と子

ども達との物理的距離は、近くにおくことになる。これらのことは、日常の保育活動を担いながら、個々の子どもの行動範囲の変動をとらえながら細かくかわりをもつということも、保育者自身が自分に課すということである。

保育集団の評価を1ヵ月ごとにまとめたところ、5

月にはB、I、Tが○印として、6月にはB、T、7月にはBのみとなった。このことは、保育者がとらえる子ども達集団の「問題」が、小さくなったということであり、また保育者と個々の子ども達とのコミュニケーション関係の成立をみたということができよう。

表 I 出会ひの月に得られたゆり組の子どもの特徴

子ども	性	特徴	評価	4月の情報
A	男	笑顔が素顔	X	笑顔が素顔であるかのような表情が多い。困る状況におちいると、表情が一転するので、すぐにわかる。保育者が気づくまで困った顔を見ている。
B	〃	たよりになる	X	1人格よく、声が大きく明りよくしゃべる。指示が伝わりやすく、反応がよい。申しおくりと同様である。
C	〃	危険に注意	◎	意志が言葉として保育者や友達に伝わりにくい。友達に相対する時、おったような、相手をにらみつけような表情をする。たたくことがある。集合してから部屋から出てゆくことがある。
D	〃	ソフトでおやか	○	保育者のはなしをきき、それにむとづいて行動する。近づいてきて保育者にはなしかける。しゃべりながら、おくりとしてソフトな印象をうける。
E	米	ねむらない	○	午睡時間中、ねむらない。4月後半、ぜんそくの発作をおこし、ぜんそくであることを認める。大勢で泣きさけぶ。Jをたたく、つねるの行動をする。
F	〃	明るく元気	X	日え上手である。表情・行動ともに非常にはっきりしており、わかりやすい。よく遊び、よく食べ、よくねむる。
G	〃	じんぐり目	○	双子であり、表情・行動が似かよっているため、たびたび両者を混同しがち。
H	〃	細い目	○	困った状況がおこると表情にあらわれる。2人で助けあい行動している。
I	〃	暗く困った顔	○	保育者の前では声を出してしゃべらない。こちらの問いかけに対して、首をたて、横にふり返す。わからない時は、わからないあるいは困ったような表情をする。
J	米	大泣き 早口でしゃべる	○	一日中といつてよいくらい大声で泣きさけんでいる。手先の動きが未熟で、日常生活習慣を習得する活動において、自分からやってみようとする動きがなく、受け身に見える。
K	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年めに入ったが、日常生活習慣においてできないことが多い。
L	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年めに入ったが、日常生活習慣においてできないことが多い。
M	米	一生懸命 ききに走る	○	わからないことは、なんでもすぐに「せんせいにききなさい」と母親に言われているとおり、泣きながらでも、わからないこと、困ったことを伝えに来る。
N	〃	入室拒否	○	入園して4～5日間、保育室の外から、中をうかがっていた。困った状況になると、泣き出す。
O	米	わが家の ふるまい	○	生活習慣において、「うちでは○○するよ」「だってお母さんは△△するよ」と、わが家のやり方も主張する。困ったこと、わからないことは、泣いて知らせる。
P	女	おねしょに注意	○	おもしろい、おねしょが多いと、母親と昨年の申しおくりにより伝えているが、新年度になってから一度もしない。生活面では、自分で考え動いている。
Q	〃	よみとりにくい 表情	○	保育園生活3年めに入ったが、日常生活習慣において、できないことが多い。言葉での指示が伝わりづらい。表情の動きがつかみづらく、よみとりづらい。
R	〃	かん高い声 反応がはやい	○	かん高い声、早いペースで、時には人を制してしゃべる。保育者が集団に問いかけると、いち早く大きな声で反応する。食事時間を長く(他の子ども達より)要する。
S	〃	たよりになる	X	2年めの保育園生活にすっかり慣れ、自分で考え行動している。保育者の手伝いが必要で、本人もたのまれることも期待されているようでもあり、できることで自信をつけている。
T	米	心臓疾患 あり おもしろい注意	◎	心室中隔欠損のため手術をうけている。家庭では大声をほりあげ、元気であると母親。おもしろいおもしろい、ひんぱんにする。こちらからの問いかけに対し、声での応答はなく、首をふることで意志を伝える。
U	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年めに入ったが、日常生活習慣において、できないことが多い。言葉による指示が伝わりづらい。
V	米	泣くことが多い	○	「おもしろいね」「おもしろいね」と、いやな時、又はその状況がおこる前になると、泣き出す。立ちどまり、あるいはイスにすわり、指をくちくちく周囲を見ていることが多い。
W	〃	泣くことが多い	○	新入園児が泣きわめいている中において、目をまわしておどろいているような表情で当初の1週間ほど過ごす。困ると指をくちく泣き出す。
X	米	泣くと目立つ	○	存在を忘れてしまふほど、ふたんはおとなしい。目立たない。生活習慣の習得が、新入園児の中では早い。困った状況になると、一変して大声をほりあげて泣き出す。
Y	米	おねしょをする	○	おねしょをする。食べないものが多い。気が強く、人を制して自分の意志を通すところがあると母親語っていたが、それは感じられない。新しい環境にとまどっているように見える。

米・新入園児を示す